

2019年度 第21回 愛恵エッセイ受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～わたしらしく、あなたらしく～



公益財団法人

愛恵福祉支援財団

2019年度 第21回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～ わたしらしく、あなたらしく ～

公益財団法人

愛恵福祉支援財団

光を 抱き

闇に 育まれた子

認められない 混沌も

隠さざる得なかった 切望も

答めるものない 宇宙の旋律

果てない虚空の 愛しい星彩

表紙 「許しの詩」 土田 千恵

“豊かな福祉社会を創るために”
～ わたしらしく、あなたらしく ～

「理事長のことば」…………… (4)

■ 学生の部

〔最優秀賞〕

・意識を変える…………… 片山祈実香 (6)

〔優秀賞〕

・わたしらしく、あなたらしく…………… 唐沢 杏里 (9)

・一人ひとりの違い…………… 志田明クラウド (12)

・心のバリアを外そう…………… 三宅さくら (15)

〔佳作〕

・令和の時代のバリアフリー…………… 棚山亜莉沙 (18)

・最期の選択…………… 泉 遥香 (21)

・豊かな福祉社会を創るために…………… 鍾 暁燕 (24)

〔奨励賞〕

・みんな同じだから…………… 兵藤 優生 (27)

■ 専門職の部

〔最優秀賞〕

・「らしく」のスタートラインに立てない子ども・若者たち …… 菊池真梨香 (32)

〔優秀賞〕

・「レインボー」の子 …… 張 世和 (36)

・挑戦に失敗も共に…………… 酒井 昂杜 (39)

〔佳作〕

・オンジの帰宅…………… 下野えい子 (42)

■ 一般の部

〔最優秀賞〕

・笑顔から生まれた心のシェア…………… 塚野 安枝 (46)

〔優秀賞〕

・笑う門には福来たる…………… 渡辺 勇三 (49)

〔佳作〕

・病気（統合失調症）への理解を広げるために…………… 西 直人 (52)

・介護は生活の一部分…………… 鈴木 愛子 (56)

・音…………… 長井 文 (59)

〔奨励賞〕

・生き甲斐の生涯学習…………… 佐藤ゆき江 (62)

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…………… (65)

ごあいさつ

公益財団法人 愛恵福祉支援財団

理事長 高原 敏夫

新しい世紀を迎えるにあたってなにかを期待し、希望がかなえられるような思いを抱いたことは多くの人たちに共通するものでなかったでしょうか。それからすでに20年を過ぎました。

20世紀は「戦争の世紀」だったということから、新しい時代は戦争のない世界へ、民族共存、共生、平和への努力を、働きかけをしようとの思いがありました。

しかし、いまだ世界は大国といわれる国々がこぞって覇権を争い、自国優先、排他主義からの戦争や紛争は止むことなく、難民や貧困を生み出し多くの人々を困難な状況へと追いやっています。

また、我が国にあっては格差社会と貧困が連鎖し社会の分断が見られるようになりました。また自然災害により毎年のように生活環境を破壊され再生への経済的負担が強いられ限界社会、崩壊時代など人々は生きにくさを実感させられます。

高齢、少子化は国の活力を停滞させます。

セーフティ・ネットである社会福制度・保障のさらなる向上が期待されます。

今も、これからも求められ創造したい福祉社会について、エッセイを寄せていただきました。

応募作品は、日常の生活を見つめ感じながら、自主的に実践的に社会とのかかわったことから社会福祉にたいして啓発されるものであります。

2020年2月

学 生 の 部

■最優秀賞

意識を変える 片山祈実香

■優秀賞

わたしらしく、あなたらしく 唐沢 杏里

一人ひとりの違い..... 志田明クラス

心のバリアを外そう 三宅さくら

■佳作

令和の時代のバリアフリー 梶山亜莉紗

最期の選択 泉 遥香

豊かな福祉社会を創るために 鍾 暁燕

■奨励賞

みんな同じだから..... 兵藤 優生

■ 最優秀賞

意識を変える

片山 祈実香

私は三年前、急性白血病という病気にかかり、二年間入院治療と通院治療を受けていました。病気で失ったものはたくさんあります。治療が全て終わり病気から解放されると思った間際、今度は治療薬の副作用による骨壊死と診断を受け、車椅子生活が始まりました。車椅子を使えば楽ができると思っていたのですが、実際は全然違います。例えば、5センチの段差が上り下りできない、駐車場の優先スペースは空いていないことが多いなど、生活上の様々な弊害は一度体験してみないとわからないものだ実感しました。

その経験から、豊かな福祉社会を創るために何ができるのかを考えるようになりました。

気がついたのは、海外と日本での障がいへの意識の違いです。過去には、世界的に障がいのある方を差別する傾向がありましたが、現在日本と海外では、当たり前に大きな違いがあります。海外では差別をしてきた歴史を悔い、差別は恥であるという教育を受けます。例えばアメリカでは「インクルージョン・ルーム」といい、障がい者と健常者が一緒に授業を受けます。日本にも海外にも色々な考えを持つ人々がいますが、大事なのは気持ちを行動や態度にどう表すかです。例として、車椅子を使いエレベーターに乗ろうと待っている人がいるとき、海外では優先的に車椅子を使う人から乗せるべきとする人が多いですが、日本では健康な人が後から来たにも関わらず先に乗り、車椅子の人は乗れず順番を待つことも多く、実際に私

は何度もその経験があります。エレベーターに乗る時に限らず、バスに乗る際も日本では障がい者が後から乗ることが多く、海外では先に乗ります。香港やシンガポールでも、その場に居合わせた日本人の健常者が先に乗ろうとして止められ、運転手に怒られているのを見たことがあります。また、大荷物を抱えた方が、エレベーターを私よりも先に待っていたのに順番を譲ってくれたことがありました。そのとき遠慮しようとしたところ、「なぜ先に乗らないのか」と言われました。そして、外国人の友達は自主的に介助をしてくれます。さらに、エレベーターや席などを譲ってくれるのは外国人が多いです。つまり、障がいのある人への配慮が当たり前になっているのです。また、アメリカでは障がい者を「障がいと共に生きる人」と呼びます。もし「弱者」と呼べば、差別だと批判を受けることでしょう。弱者という言葉には、かわいそうという思いが込められているからです。ですが日本では「社会的弱者」という言葉が公の場でも使われます。「弱者を守ろう」「弱者を大切に」という文もよく見かけます。それらからも、「障がい者はかわいそう」という考えが日本人の大半に根付いているとわかります。ですがあなたは、かわいそうな人だと思われたいですか？

内閣府の障がい者の社会参加促進等に関する国際比較調査データでは、障がいのある人を前にした時の意識について、日本では6割が「意識して接する」と回答し、ドイツとアメリカでは「意識せず接する」が9割を占めています。このことから、日本では障がい者の特異に感じるのに対して、海外では当たり前のことと感じていることがわかります。

私は車椅子生活になって気づいたのですが、障がい者は自分の特異な存在だと思われたくありません。それはつまり、障がいによる

差別や偏見を受けたくないということです。差別をされたくないという気持ちは、誰にでもあるはずです。ですが公共の場に出れば、蔑視や好奇の目に晒されてしまいます。例えば身体障がい者で車椅子に乗る方は、バスの乗降で運転手の介助が必要ですが、その間乗客も待たせてしまうので、運転手からも乗客からも嫌な顔をされることがあり、そのため外出が億劫になることも多いそうです。2016年に「障害者差別解消法」が施行され、障がい者への差別の禁止や合理的配慮が求められるようになりました。しかしその後の障がい者総合研究所の調査で、日常生活において差別を受けたと感じた人は59%、「障害者差別解消法」の施行以降も差別・偏見が改善していないと感じる人の割合は89%とどちらも高い数値です。これらのデータから、障がいへの意識を改善しない限り、差別意識は無くならないと考えました。根付いた意識を変えるのはなかなか難しいことですが、海外では実行されています。意識を変えるには、行動を変えるしかありません。一人が行動を変えれば、自然と周囲の意識や行動が変わっていくのではないのでしょうか？自分は障がい者を助けるだけで、何も得られないと思う人も少なくありませんが、本当にそうでしょうか？彼らから学べることはありませんか？接する相手がどんな人でも、助け合い学び合うことが豊かな人間関係を創る、そう私は思います。

最後に、この文章で、少しでも多くの方々が、障がいのある方々の気持ちに気付いていただけると嬉しいです。

(沖縄尚学高等学校 普通科 2年)

■ 優秀賞

わたしらしく、あなたらしく

唐 沢 杏 里

私が思う、私らしくあなたらしくは、利用者の方一人ひとりに合った介助の仕方だと。

私は福祉科で3年間、様々な体験をしてきました。福祉科の授業では実習があり、少人数に別れて介護施設やその他様々な施設で職員の方々の技術を見学させていただいたり、実技を行ったりします。

その実習で、対象者の方を決め、その方の話を聞かせていただき介護計画を作成し実行するという課題がありました。3年生で実習にも慣れ、普段のコミュニケーションをすればいいと思っていたのですが、介護計画を作成するにあたって対象者の方のしてみたいことやその方に合った支援の方法を考えなくてはなりませんでした。日頃のコミュニケーションとの違いには、その方のニーズを考え何を課題に挑戦すべきかを考える必要があったのです。

介護計画作成1日目、私はまずこの三週間という短い期間の中でどう対象者の方を決めさせていただくのが良いか考えた結果、自分がどう支援をしたいか、どう対象者の方に寄り添えるかを考え、その目標にあう方を選ばせていただこうとしていたのです。今、思うと対象者の方らしさというものが無くなっていた気がしました。私は対象者の方がどうしたいか、何をしたいかを優先させずに、自分が介護計画を作成しやすい様、対象者の方を選んでいたので。これはどの利用者の方もあてはまることですが介護者の安楽を考えたり、時間が無いから、手間がかかるからといって利用者の方の意見

や生活を優先せずにいることが多くなっていると思います。その中で私は対象者の方を選ばせていただいて、コミュニケーションの中でその方の、好きな事、嫌いな物、その人の性格などを知ることができました。ですが本題は、その方の挑戦したいことを知りたいのに対象者の方は内気な性格でなかなか自分の事を話そうとしていただけませんでした。でも私はめげずに対象者の方とコミュニケーションを何回も何回もとって、やっと自分の意見を言うてくださることが出来ました。

「私は買い物がしたい、でもみんなに迷惑になるし、私ばかりをかまうことは出来ないから申し訳ない。」

対象者の方のその一言で、私は自分がしたいこと、挑戦したいことを周りの環境にのまれてあきらめてしまうなんてもったいないし、絶対に買い物に連れて行ってあげようと思いました。まずは買い物に行くためにも足の運動を行ったりしました。

買い物の日、対象者の方はすごく楽しそうで、買い物が終わった時には、

「私のためにこんなに用意をしてくれたありがとう。女性同士の買い物だから自分が好きなものとか下着とかたくさん買うことが出来てうれしかった。」

とってくださいました。その一言で思ったのは、自分らしく、その人らしくとはやっぱり自分がしたいことや挑戦してみたいことを周りの空気に合わせてあきらめてしまったり、介助者が大変そうだから言わないのはすごくもったいないと思うし、私達介助者が気付いてあげないと言えない環境があるのだと思います。でも一人の介助者だけで何人もの人をまとめることも出来ないし、介助もできないと思います。

私が実習を通して、私らしさその人らしさを学んだことは、介助者や職員の方の目を気にせずに言えることを言える環境が大切だと思います。私が介護計画を作成した利用者の方はあまり自分のことを言えない方で、私とコミュニケーションをたくさんとっていただけた事で自分の好きなことを言えずにいた人だったので話すことに対してあまり苦手な人だったから大変だったり、自分もコミュニケーションを取ることも苦手なので難しかったけれど、介護計画も楽しく実行して利用者の方にも喜んでいただけたのでとても良かったです。自分にとってもいい経験になったし、利用者の方にとっても喜んでいただけて良かったです。

(群馬県立吾妻中央高等学校 福祉科 3年)

■ 優秀賞

一人ひとりの違い

志田明クラウス

どうしたら福祉社会を実現できるのでしょうか。「福祉」とは「みんなが幸せに生きていけること」ではないかと思います。ではどうやったら、「みんなが」幸せになれるのでしょうか。

もし、みんなが同じ考えで、同じ性格で、同じ国籍や人種だったら、そもそも「福祉」という言葉が無くて、みんなが簡単に幸せになれます。でも世の中は違うもので溢れているし、人がみんな一人ひとり違うそれぞれの個性や自分らしさを発揮することで、世界は面白くなるのだと思います。そして人間は、生まれてからその個性や自分らしさをどこでも発揮する権利があります。でも、今の社会ではみんながそれを存分に発揮できるのでしょうか。

「みんなやっていることだから、こうしなきゃダメ。」

「時代の流れに、合わせるんだ。」

「校則だから、こうしなきゃダメ。」

僕はこのような言葉を学校などで嫌と言うほど聞かされました。今の社会はみんなが違うことをするのを嫌い、みんなが違う格好をすることを嫌い、みんなと同じにできない人は、冷たい目で見られるような社会だと僕は思います。そもそも人はみんな違うのに、みんなが同じことをするのは不可能ですし、何より体が不自由な人や性的マイノリティーの人など、どうしてもみんなと同じようにできない人には特に生きづらい世の中になっています。僕もみんなと同じにするということは、夜の空に見える星を数えるのと同じくらい

難しいことです。

僕は生まれた時から、みんなと違う人でした。幼稚園のときから指示されたことができなかったり、人が大勢いるという環境が辛くてそこに集まらなかったりしました。僕はその頃小児精神科医に自閉症と診断されました。自閉症とは、「対人関係の特異性」「コミュニケーションの障がい」「イメージネーションの質的障がい」の三つの特徴から診断される障がいです。でも僕は小学校中学年ぐらいの時まで、自分が障がいを持っていることを特に意識しないで生活していました。しかし高学年ぐらいになった時、僕はクラスで浮いている存在であることに気づきました。おまけに、みんながやらないような行動をすると他の生徒にからかわれたり、いじめられたりもしました。それだけではありませんでした。中学校に入ったら、僕がみんなと同じようにできないということを先生達にわかってもらえず、僕を無理やりみんなと同じようにさせようとしたのです。それが原因で僕は中学校にまともに通えず、いつも欠席、早退、遅刻ばかりしていて、時には死にたいとまで思ったりもしました。

でもそんな僕でも、受け入れてもらえる場所がありました。一つは教会です。教会には、いろいろな悩みを持ってやってきた人や、受け入れられるような場所が無い人が大勢集ります。僕はそうした人たちと仲良くなりました。僕は教会の一人ひとりがいたから、つらい中学校生活を乗り越えることができたと思います。そしてもう一つは、今通っている東京 YMCA 高等学院です。そこは僕と同じような発達障がいを持っていたり、不登校経験がある人が大勢集まる学校です。多様性を認め、みんなの個性、みんなのいいところ、みんなの色が存分に出ているところです。僕はそこで今まで眠っていたありのままの自分を出すことができました。そして今では友だ

ちも増えて、毎日が楽しくなりました。僕は学校や教会以外でも、社会がもっと自分らしく生きられるようになればいいのになあと思いました。

みんなが幸せになる社会を創るためには、みんなが違うということを理解し認めることが一番大事なのではないかと思います。それは社会的に排除されやすい人はもちろん、この世界のすべての人に言えることではないのでしょうか。なぜなら、人は「みんなちがって、みんないい」からです。そして、みんなの違い、個性を尊重してみんなが幸せになれるような社会のことを「福祉社会」というのではないのでしょうか。その社会を実現するためには、誰かに頼ってはいけません。僕たち一人ひとりの行動が、勇気が、希望が、世界を変えるのです。今この瞬間でも、みんなと違うことでいじめられている人がいます。差別されている人がいます。それが原因で自殺をはかろうとしている人がいます。こうした状況を変えられるのは、僕たち私たちなのです。誰もが幸せになれるように、一緒に声を上げていきませんか。

(東京 YMCA 高等学院 2年)

心のバリアを外そう

三宅 さくら

今まで私は、「障がい者」という言葉を、何の疑問も感じずに使ってきた。また、「障がい者」と呼ばれる人達は私達とは別なんだと思っていた。道で車椅子に乗っている人とすれ違えば、可哀想だなと当然のように思っていたし、白杖をついて歩いている人が前からやってくれば、これもまた同じことを思っただけで道をゆずっていた。今、考えれば私たちはなんて無知だったのだと思う。

東京で二度目のオリンピックが開かれるのは2020年、つまり来年。私も含め、全ての日本人は、その日を心待ちにしている。どの家庭でも一度は、家族の団らんの話題に上がったことだろう。つい先日、三宅家でもオリンピックが話題になった。その時の母の言葉が、「障がい者」という言葉、そう呼ばれている方について、私に考えさせることになる。

その日、私と父は東京で二回もオリンピックが開かれるなんて凄い、と話していた。そして、そのオリンピックをテレビで観るべきか、それとも実際に現地で観るべきかで意見が分かれ、口論になりかけたところ、母が仲介に入り、話題を変えた。

話題はパラリンピックだった。私はパラリンピックは障がい者スポーツだから興味がない、と言い、父も賛成した。母もきっと賛成するだろうと思って話を振ると、母はじっと黙ってから、悲しそうな、でも非難もこもった声で、

「障がい者スポーツ、とか言って恥ずかしくないの。差別しか感

じられない。自分が知らないからって勝手に決めつけて。そんな子に育てた覚えはない！」

と言った。なぜそんな風にいわれなければならないのか。私は腹が立って腹が立ってしょうがなかった。

その日の三宅家の団らんは、後味の悪い雰囲気で解散となった。その日の夜、腹が立つのがおさまって、母が言ったことを、じっくり考えてみた。そして考えた末、私がパラリンピックを、「障がい者」と呼ばれる人のことを、全くと言っていいほど知らないことに気がついた。

そこで、調べることにした。ユーチューブでパラリンピックを検索すると、ある義足の陸上選手のインタビュー動画があった。義足で陸上なんてできるのか、どんな風にはしるのか気になったので、見てみた。

そこには、私たちと同じどころか、はるかに優れたアスリートの姿があった。陸上といっても所詮障がい者の陸上、100メートル15秒くらいならまあ凄いかな、くらいにしか思っていなかった。ところがどうだろう、なんとその選手は100メートルを約10秒で走ったのだ。それだけでも私にとって大きな衝撃であったのに、さらなる衝撃が私を待っていた。その選手はインタビューの中でこんなことを言っていた。

「障がい者を可哀想と思わないでほしい」

もの心ついてから「障がい者」＝「可哀想」という考えが定着していた。その時私は、13年間の過ちに気付いたのだ。

次の日、私は母に自分の大発見を報告した。母は、時折、うんうんと頷きながら黙って聞いていた。

「ママ、『障がい者』って言われている人と私達って何も変わらない

よね。」

母は嬉しそうな顔をした。

「だってさ、私は『障がい者』じゃないけれど、100メートルを10秒で走るなんてむりだもん。」

障がい者を取り巻く障壁（バリア）は全部で四つあるといわれている。一つが物理的なバリア。一つは制度的なバリア。また一つが文化・情報面でのバリア。そして、もう一つが心のバリア。

一番簡単に外せそうに見えて、実は一番外すことが難しい「心のバリア」。私はこれを少し外すことができたと思う。それは、「障がい者」と呼ばれている人について知ったから。「知る」ことによって少しずつ、バリアは外されていくのだ。

皆が、「障がい者」と呼ばれている人のことを知れば、「障がい者」という言葉がいなくなる日が近くなると思う。

私は、「障がい者」について知り、「障がい」は個性だと思うようになった。誰でも、得意なこと不得意なこと、出来ることと出来ないことがある。それは個性だ。

私らしく、あなたらしく生きていくために、つまり、豊かな社会を創るために、私達に出来ることは「知る」こと、そしてその上で認め合うことではないだろうか。

一年後のパラリンピックが楽しみだ。

（大阪教育大学附属池田中学校 1年）

■ 佳作

令和の時代のバリアフリー

～兄から託された未来～

櫛山 亜莉沙

今から7年前、私は最愛の兄を亡くした。11歳の誕生日の1週間後、兄はこの世を去った。その時の強く深い喪失感は何をしても埋められず、ただ悲しみだけが襲ってくる。辛く苦しい毎日だった。兄を思い出さない時はなく、気がつけば涙がほほを伝わってくる。「あんなに懸命に病気と向かい合い、闘ってきた兄さんがどうして…。」そう考えるだけで、こらえきれぬ悲しみで胸が張り裂けそうになった。

全ての事に無気力になっている私に母が優しく声をかけてきた。「お兄ちゃんが今の亜莉紗の姿を見たらどう思うかな？ きっと『しっかりしろ！亜莉紗らしくないぞ！』って言うんじゃない？」と。イライラしていた私は「私らしいって何？」と、母に噛みついた。すると、母は笑顔で大事なことを忘れてない？ 亜莉紗は、お兄ちゃんの妹なんだよね？」

雷にうたれたような衝撃が走った。そうだ！お兄ちゃんは、私の誇りで自慢だった。どんなに辛い治療も最後まで諦めることがなかった兄は、私の憧れで、私も兄のように強い人間になりたいと、いつも感じていた事を思い出し、急に今の自分が恥ずかしくなった。悲しみに暮れてばかりいたって、兄が喜ぶはずがない。その時、しばらく自分の弱さに気がついた。

と同時に、私らしさって何だろう？と、今一度考えてみた。元来、

私は人一倍負けず嫌いで、小さい頃から、ゲームであれ、勉強であれ、スポーツであれ、兄が出来ることは絶対私もできると思い込み、よく兄に挑んでは、返り討ちに遭っていた。それがまた悔しくて、兄に勝とうと必死に頑張る。そして決して誰にも涙を見せないのが私のポリシーだった。今考えれば、いつも兄が私の目標で、私に向上心や達成感を与えてくれたのは兄だった。そして何より兄の凄いところは、私が何かを出来るようになると、兄は誰より喜んでくれ、いっぱい褒め、私を認めてくれた。そんな兄が大好きだった。そんな兄の笑顔が大好きだった。だから、兄がこれからも笑顔でいられるよう、私自身が前を向いて進んでいなければと思うようになった。やはり、兄は偉大な存在だったと痛感させられた。

そんな兄でも闘病中は、長期治療のため一時帰宅もままならず、それに加え、薬の副作用や幻覚、食事制限に危険防止のための身体拘束など、過度のストレスに悩まされることばかりだった。そのせいか、異常なまでに頑なになったり、些細な事で怒ったりすることもあった。もともと温厚な性格だったので、初めは驚いたが、思うようにならない苛立ちからもがき苦しんでいた兄は、身体的苦痛のみならず、計り知れない精神的苦痛も抱えているのだと次第に理解できるようになった。兄は常に自分の回復を信じ、短期間中に繰り返される再発にも、二度の移植で立ち向かった。車椅子生活を余儀なくされ、視力障害が生じて、兄は決して逃げ出さなかった。

しかし、兄の頑張りとは裏腹に、兄の障害は、病院の外では想像以上の不自由さの連続だった。戸建ての我が家は勿論、地元の小学校にもエレベーターがなく、誰かにおんぶか抱っこしてもらわなければ、階上階下への移動は出来ない。外出先では、子どもが車椅子に乗っているだけで、周囲の視線は必要以上に兄に注がれた。まる

で動物園の檻の中の珍獣をのぞき込むような眼差しだった。見られる事に疲弊した兄は、帽子を目深にかぶって家を出るようになった。また、入りたいお店やレストランがあっても、ほんの少しの段差、間口や通路の狭さの為に、車椅子のままでは入店できないことも多々あった。「僕のせいでゴメンね。」と謝る兄に、母は決まっただけでこう言った。「ここは次の機会にしましょ。きっと神様がもっといい所があるよ！と教えてくれてるのよ。今日はいい下見が出来てよかったじゃない。まずは今を楽しみましょう」と。その言葉を聞くと、なんだか胸のつかえが取れた気がして、いつの間にか兄も私も眉間にシワを寄せていたしかめっ面から解放されていた。

母の「お兄ちゃんは、お兄ちゃんのままでいいのよ。今の自分に自信を持って、今の自分を愛してあげて。」という言葉は、私たちに大いなる勇気と未来を与えてくれた。きっと兄も、その言葉に支えられ、どんな苦境も乗り越え、強靱な心で何度も立ち上がったのだろう。兄の生への執念、魂の叫びは、いつも病室のベッドの上から届いていた。して、それは今でも変わらない。「不屈の精神」それが兄の生き様そのものである。

我々、健常者でさえ生きにくくなってしまった現代。無意識に「バリアフリー」などと軽々しく口にしてしまいがちだが、それはあくまでもスロープや施設などのハード面での話に過ぎず、そこに人間の優しさや真心は伴っているのだろうか。令和の新時代に求められているのは「心のバリアフリー」ではないかと私は考える。兄のような障がい者に寄り添い、共に生きる社会こそが、よりよい豊かな福祉社会への第一歩だと、私は願い、信じる。

(千葉県立千葉高等学校 普通科 1年)

最期の選択

泉 遥香

「お母さん、もう長くは生きられないみたい」

そんな小説みたいなセリフを、私は11歳で聞いた。何度も大学病院で入退院繰り返していた母だった。しかしその言葉を聞いたのは、家の近くの病院、ホスピスの一室。その日は父と母に買ってもらったジャンパーが活躍するような寒さだったにもかかわらず、病室には温かく優しい光が差し込んでいた。正直言うと、私はあの時の感情が思い出せない。母の目の前で泣いたような気もするし、強がって泣かないことで自分は大丈夫だと見せた気もする。ショックが強すぎて呆然とした気も。だけど、母の目ははっきりと覚えている。自分の死を自分の子どもに伝えた、母の強き目を。

ホスピスとは、ホスピス緩和ケアを行う病棟。無理な延命をせず、からだや心のつらさを総合的にやわらげ、人生の最期の時期を穏やかに迎えることを目的としている。母は私の前ではいつも笑顔だった。大学病院で辛い治療を受けた時も、リハビリから帰ってきたあとも、髪の毛が全て抜けたあの日も。母はどうして私に苦しい姿を見せなかったのだろう。どうしてホスピスへと向かったのだろう。そう考えた時、私はひとつの可能性を思った。

私たちは今、死を身近には感じていないように思う。それは古来より伝えられてきた死の形が、身近には感じさせないよう遠ざけているからだ。死は忌み嫌うもの。私はその考えに待ったをかけたい。死は本当に忌み嫌われなければならないものなのかと。現代に生き

る人間は生を自分らしさ、死は自分らしさの消失というように捉え生と死を別物と考える。生きているものなら誰もが死にたくない、死ぬことによって自分らしさを損ないたくないその気持ちはもちろん分かる。しかし、死はすべての終わりなのか、死は私を消してしまうのか。死は怖いものなのか。そうではない。私は母が亡くなって初めて死体というものを見た。棺桶で永遠の眠りについた母は、今にも目が開きそうで、胸の前に組んだ手が解けそうで、寝言を言いそうで。お葬式に来てくれた人達は生前の母を思い出し母に話しかける。まるで母は今から目を覚まし、来てくださった人達に別れの挨拶でも述べそうだった。この世を去ったあとの母は自分らしさをなにひとつ無くしていなかったし、私たちひとりひとりの心の中に母はいた。

生きていれば誰もが必ず死を持っている。これは変えようのない事実である。現代に生きる私たちは「いつ死ぬか」を選ぶことはできないが、死が事前に分かれば「死に方」を選ぶことができる。いわば「最期の選択」だ。私たちはこの世に母の身体から生まれ、長い時を経て成長し、様々な形で自分の最後を悟り、そしてこの世を去っていく。産まれること、去ること以外私たちは誰一人として被ることはない、千差万別の人生を経験する。それは同時に人生というものに正しさや間違いがないことの証明でもある。どう生きようと、あなたが選んでいい。きっとそういう考えが私たちに「最期の選択」をさせてくれる。つまり死を突きつけられると、私たちは死と同じくらいに生を感じられる。別の言い方をすれば、初めて死を生と同等に感じられるのだ。

母はもう自分がこの世を去らなければならないと悟った時、確かに感じたはずだ。今生きているということ。だからこそ無理な延

命を求めずホスピスへと、健やかな母らしい最期へと向かったのだ。母は私に弱い自分を見せたくなかったのではなく、自分らしさを貫く母の姿を見せたかったのだと思う。そして母は私に死ぬことを伝えた時、強い生を訴えていた。自らの目で。「私は死ぬ。私は生きる」と。

そして数ヶ月後母がこの世を去り、私は骨になった母を見た。本当は母が骨になる姿を見るのは怖かった。だけど、見たすぐあとの感想は「なんだか一回り小さくなったなお母さん」だった。骨になった母はやはり私の母で、何も怖くなどなかった。

現在、私は大学で現代社会学を専攻している。社会を築きあげた人間は、その代償に自分らしさを持ちにくくなった。社会を持たない他の生物は自分らしさなど求めない。求めなくても自分らしさを本能としてわかっているのだ。先程述べた死の概念も本当なら忌み嫌われるようにはならない。なぜなら生も死も必ずあるものであり、自分だけのものだから。自分らしさを探し不安になる私たち。一見弱く脆そうにも感じる。しかしだからこそ自分の中に強さや覚悟が生まれた時、「自分らしさ」が強く光り輝くのではないだろうか。私はこれからも大学で社会を学び、人間を学び、世界を知っていく。そして私らしさを母のように求めていく。

(筑紫女学園大学 現代社会学科 2年)

豊かな福祉社会を創るために

鍾 曉 燕

私が幼い時、祖父が脳梗塞で倒れて半身不随になりました。一年以上入院して、退院後も長期間に及ぶ療養をする中で、生活上にさまざまな困難がありました。母は毎日朝から深夜まで祖父を看病しながら、家族の生活を一生懸命頑張ってくれていました。自分のことは省みず、本当に大変な介護をしているのを間近に見てきました。金銭面では医療費だけではなく、同居している家族全体の生活費の心配や父の仕事をする為の資金、そして私たちの学費などの工面、たくさんの家族への気遣いなどがあり苦勞をしました。介護には解決が難しい生活の問題や金銭的なことが多くありました。この経験をきっかけに、世の中には病気になって、入院し、また退院後の介護生活に困っている人がたくさんいることを知りました。

私は医療に密接な関係があると思い、母国の中医大学で健康や薬について勉強し、漢方薬と栄養のことについて専攻しました。しかし、この学びだけでは利用者の生活、心理的、社会的な問題は解決しにくいと気づきました。そして、中国の勉強だけでは足りないことと、現在日本の大きな問題のひとつとして高齢化社会における介護の必要性が高まっていることを知り、勉強したいと思い来日しました。

介護の勉強をするためには日本語を習得することが大事だと思い、日本語を学ぶために東海大学別科生になり日本語を勉強しました。

大学の図書館で介護・福祉の本を探していた時に、東海大学健康

科学部社会福祉学科の堀越由紀子先生の「保健医療サービス」の本を読み、日本の医療ソーシャルワーカー（以下 Medical Social Worker：MSW と呼ぶ）の存在を知りました。そのきっかけで、福祉サービスを勉強したいと思い東海大学社会福祉学科の研究生になりソーシャルワーカーの現状や必要性を学び始めた。その学びの中で「連携」や「コミュニケーション」のシステム化に着目しました。

医療ソーシャルワーカーの連携と協働は医師だけで対応できない病気や理学療法や作業療法、言語療法などの診療補助職とともに、退院後の生活状況を入院リハビリ中から予測して準備し、そして現代の超高齢化社会に向けて、地域の側に新たな連携役として医師・歯科医・ケアマネジャー・介護福祉士・社会福祉士・理学療法士・栄養士・看護師・福祉用具専門員、福祉住環境コーディネーター等との連携課題があります。これらの連携と協働は現在社会において不可欠であり、もっと枠組みを簡素化し、早期なチーム作りが必要と考えます。

私は「豊かな福祉社会を創るために」は多職種連携と協働のためのチームを早期に立ち上げるためチームの相手方を瞬時に選択するためのシステム化が必要と考えます。そのためには医療ソーシャルワーカーとの連絡の取り方、地域に根付いたカンファレンスの仕方のシステム化、チーム相手方の連絡網の充実などや、行政機関との綿密な連携及び相談ができることが必要と思います。それによって、クライアントの早期の相談面接が可能となり、早期に解決に向けてチーム全体や行政との連携ができ、クライアントとの関係構築が早まりクライアントも安心できる生活がおくれて家族にも安心感が生じることと思います。

医療ソーシャルワーカーのことは一般的にはあまり知られてない

ように思えます。もっと身近な存在であるべきで、国の公的機関や地域の公共団体が率先してあげられていないクライアントに情報が届けばよいのではないかと考えます。

私は、多種職連携・協働のチームの一員である介護福祉士になるために YMCA 健康福祉専門学校へ入学しました。授業の一環として介護実習で施設の利用者とコミュニケーションをとることや介護技術を行うことに大変苦勞しました。毎日元気に笑顔で挨拶し、寄り添って行くにつれて、最後には利用者の方が「寄り添ってくれて、ありがとうございます。また来てね」とのお別れの挨拶をしていただきました。本当に涙が出るほど嬉しかったです。

また、あるテレビで「世界一の清掃員」にとっても感動しました。外国人の清掃員が空港施設の清掃に心を込めて一生懸命にきめ細かくされている姿に感銘いたしました。そしてお客様に感謝されている姿はとても心を打ちました。そのことから私は利用者に心を込めて接し、介護にも細かく配慮しながら、心から喜ばれる介護士になりたいと思っております。そのような介護福祉士になるためには、人に対しての思いやりが重要だと思います。他者には他者の認知があり、人間一人ひとりが異なる認知世界を構成して生きていることを理解し、他者の認知世界を尊重し、可能な限り共感を重視していくことだと思います。利用者と人間関係を形成し、利用者をよく知ることがとても重要であることに気づきました。今後の活動にも生かしていきたいと思っております。

(YMCA健康福祉専門学校 介護福祉科 2年)

みんな同じだから

兵藤優生

私たちが、豊かな福祉社会を創るために何が必要なのか。周囲から、その人に対しての個性の理解だと思う。もちろん、医療発展のため技術や機械の向上も大切だ。しかし、その一方で人間も少しずつ考え方も変えていかななくてはならない。

私には、高校1年の弟がいる。ADHD、注意欠陥・多動性障がいと呼ばれている発達障がいだ。小学校1年の時から周りの子たちと違う行動をしていたり、落ち着きがなかったりと少し変わっていると思うようになった。通級や精神科病院に通っていた。そして中学に入学してすぐ、同じクラスの子から悪口を言われるようになった。「少し変わってる」「なんか変だよ」「近づかないで」など、言われて嬉しくないことを言われ続けた。中学に入って2人クラスだった小学校から一気に人数が増え、周りの音に気が散りやすくなり、学力もほぼ最下位だった。そして、小学校の時は何でも出来て、活発だった弟が、中学に入って自分に自信を失い、ガラッと性格も変わってしまった。そんな中、中学2年から先生の提案で特別学級になることになった。私は特になんとも思わなかったが、他人の目が怖い時期も正直あった。「お前んちの弟。特別学級なんだ」と言われるのがすごく怖かった。その一方で弟は、その環境が自分に合っていたらしく勉学に励むようになり、成績は入学当初より半分以上あがった。しかし、弟は当時、自分が何の障がいを持っているか分かっていなかったらしく、高校の入学式の日、偶然見ていたテレビ

で母がこう言った。「お前はこの障がいを持っているんだよ」そう言われたそう。私は結構前から知っていたが、弟はそれを聞いて、最初は受け入れられなかったそう。入学式が終わって帰りの車の中で、弟は「俺、障がい持ってるんだってさ。俺、これからどう生きて行こう…」と言った。高校に入学して早8ヶ月が経ったが、未だに親しい友人もなかなか作れないでいる。「クラスの子には自分が障がい者ってバレたくない」そんなことを言っていた。どうしてか聞いてみると、「また中学時代になるかもしれないから」そう言っていた。

私が中学時代は弟がそんな風に言われてもなんとも思っていなかった。寧ろ、同じ気持ちを抱いていた。私は少し違う。逆に私が変な目で見られる、見られている。そう感じていた。ある日、母が私に「守ってあげてね」そう言ったのだ。その日から私も担任の先生に相談したり弟から直接聞いたり色々努力していた。母の涙も弟の言葉を無駄にしないために。よく私の同級生はこんなことを言ってくれた。「お前んちの弟、まじ面白い」何が面白いかわからなかったが、障がい者を笑っているのではなく、行動が面白くその行動が場を盛り上げている。そう言っていた。

障がい者は確かに偏見を問われてしまう。それは何故か。私たちが外見だけで人を判断してしまうからだ。人はなんでも外見から目に入ってしまうものだ。障がい者の方だけではない。可愛い人、可愛くない人、体格がいい人など外見だけを見てその内面まで判断してしまう。障がいを持っているから何も出来ない、障がいをもっているからという言葉一つで事を片付けてはいけないと思う。

私が何故、福祉科に入ったか。それはこの世に存在する障がいを学び、その人たちのために私が出来る事を探したかったからだ。私

の弟が障がいを持っているからこそその考えだった。色々学んでいく中で、その方たちにどういった支援が必要か、どういった事が出来るのか、多く接することによってわかることだ。言葉も一つの支援だと思う。その言葉一つで相手の心を動かす力もある。しかし、その片方で心に扉を閉めてしまうこともできてしまう。

あなたはどうかだろうか。その言葉は本当に相手に言っている言葉なのか。今一度考えてみるべきではないだろうか。自分の言葉に責任を持つとはこういうことだろう。

障がい者や高齢者、全ての人たちが偏見を持たず、どんな人でも笑顔で接し、喜びに溢れる社会になるよう、私もこの社会に貢献したいと思う。

(群馬県立吾妻中央高等学校 福祉科 3年)

専 門 職 の 部

■最優秀賞

「らしく」のスタートラインに立てない子ども・若者たち …………… 菊池真梨香

■優秀賞

「レインボー」の子 …………… 張 世和
挑戦に失敗も共に…………… 酒井 昂杜

■佳作

オンジの帰宅…………… 下野えい子

■ 最優秀賞

「らしく」のスタートラインに 立てない子ども・若者たち

菊池真梨香

この日本社会は、子ども・若者が「らしく」生きられる社会になっているだろうか。

私は愕然とした。

自分「らしく」生きる権利を得られない子ども・若者たちがいるこの状況に。親を頼れなく、後ろ盾のない子ども・若者たちが自分「らしく」生きられていない現状に。

私が“その現状”を知ったのは、児童養護施設で働き始めてからだ。虐待や親の不在などの背景により後ろ盾のない子どもたちと出会い、私の人生感は変わった。

私はそれまで知らなかった。施設で暮らす子どもたちが、何を考え、何を感じ、今を、これからをどう捉えているかだなんて。

そこで出会った子どもたちは、今まで私が出会ったことのないような子どもたちだった。彼らは、どこか子ども「らしさ」を無くしていた。大人に対して常に一步引き、「この人は本当に信頼に足る存在であるか」と問うように、目の前の大人に対して斜に構えていた。そして、社会に対しても常に一步引き、この社会は自分らにとって信頼に足る社会であるかを常に伺っていた。彼らの経験してきた壮絶な人生を思うとそれも無理ない。彼らは子ども「らしさ」を捨てて来ざるを得なかったサバイバーだったのだ。

「親とこれからどうやって距離を取っていくことが適切か」。そん

なこと、私は若い頃に考えた事はなかった。しかし、目の前の子どもたちはそのようなことに悩み苦しみ、そしてすでに何かを悟っている。私が若い頃悩まなくても良かったことに彼らは悩み、私が若い頃心配しなくて良かったことを彼らは心配しているのだ。子ども「らしさ」を捨てて。

そして彼らは児童福祉法から守られる年齢を抜け、社会に出ていく。そこからも、施設出身者だからといって諦めざるを得ないことがたくさんある。「若者は若者らしく(・・・)いろんなことに挑戦しよう!」、「若いんだから何でもできる!」そういった類の言葉はどこか遠くの、あるいはテレビの中の、自分には関係のない世界のもののように聞こえるのだろう。そう、この社会は彼らが若者「らしく」生きることを保障することはできていないのである。

だから私は、彼らが生きやすい社会にしていきたいと思い活動をしている。彼らが若者「らしく」周りの若者と同じスタートラインに立てるような社会の実現を目指している。“施設出身者だから”といって多くを諦めなくてもよい社会の実現を。

本来する必要のない心配や苦勞に埋もれて、前に進めなくなっている施設出身の若者に出会うたびに私は心が痛む。そういう若者に出会ったら、「あなたは悪くない。あなたは十分頑張ってきたと思う。一人で悩まないで一緒に考えていこう」と声をかける。

社会的養護。虐待や様々な理由によって親を頼れない子どもたちのことを社会が親代わりになって彼らを養育することである。社会が親なのである。しかし、社会側はどうであろうか。親である社会は彼らの顔と名前も知らない。彼らの存在さえも知らない。助けを求めていることさえも知らないのだ。今の日本の社会は子どもを知らない。私はその一人だった。

だから、この現状を知った時、私は愕然とした。そして恥ずかしさを覚えた。彼らの存在を知らずに生きてきたことを。もっと早くに知っていたかったと思った。そして、そう思っている人はたくさんいる。だから私はこの若者たちのことを伝えたいと思った。親である社会に。彼らを無き存在にしないでほしい。周りの若者と同じように、フツウの若者「らしく」生きられない若者がいることを。

「親の悪口を言っている、実家暮らしの友だち・・・いいじゃん頼れる親がいるだけ。いいじゃん、帰れる実家があるだけ」

「同じ世界を生きているはずなのに、すれ違う人たちみんなとすぐかけ離れているように思える」

「進学したかったけど、経済的な理由で諦めざるを得なかった。相当な志が無いと進学なんてできないし、進学したらしたで、できなかったらどうしようという脅迫にかられる。私たちには気軽にチャレンジすることは許されない」

「私たちには、失敗する権利が与えられていない」

若者「らしく」生きることとは何だろうか。

それは、若者たちが挑戦することを保障することである。

失敗しても大丈夫だという保障があることで初めて若者は挑戦できる。

社会的養護の子ども・若者たちにとっては、まだそのような社会になっていない。彼らの叫びは無い物かのように、社会の隅に追いやられている。

私は彼らの「声」を聴いた。心が抉られるような、そんな思いになった。そして、また、彼らの「声」の中に限りない可能性も感じた。彼らの声は、誰かを励まし、力づける宝にもなり得る。彼らこそ、日本を担っていく国の宝である。

そんな若者たちの声が届き、彼ら「らしく」生きることのできる社会の実現を目指している。そのために今日も私は彼らの「声」を届ける。

(児童養護施設元職員／児童相談所非常勤職員)

「レインボー」の子

張 世和

「好きな食べ物は何ですか」学童で入所したての子には決まって質問タイムがあります。その日は、新しく入った A くと受け答えの練習をしていました。しかし、A くの答えは「ない」でした。「好きな動物は何ですか」「ない」。A くんはその後も「ない」と「ない」と答えつづけました。しかし、彼には好きな色がありました。

「好きな色は何ですか」「レインボー」

A くのことは「レインボーの子」として強く印象に残りました。自閉傾向の A くんはいつもみんなと違う行動をする「少数派の子」として扱われてきました。ほぼ毎日本棚の脇で図鑑を読んでいます。普段はあまり関心を持ってもらえません。しかし、そのような自信を失っている子どもでも自分の行動や存在を認められることで自己肯定感が高まっていきます。それを、私は A くと過ごしていく中から学びました。

A くんはある日私に「座敷童、知ってる？」と尋ねました。私が「知らない」というとその場で色々なことを教えてくれました。「よく知ってるね、すごい！」と言うと、中国語で「謝謝」と言いました。彼は好きなことは頑張るけど興味のないものには集中できない特性を持っています。私は、彼の「好き」を見つけて伸ばすことにしました。彼は昆虫などの生物が大好きです。彼の話の聞いているとまるで小さな専門家のようにです。また、彼は漢字に興味を持っています。多くの難しい漢字を書いて、見せてくれます。

私たちが今行っている特別支援教育は人間理解です。まず心の支援で自尊感情を育み、スモールステップで個別に発達支援をします。行動の支援では、出来たらすぐ褒め、認めてあげることが大事です。

また、環境調整、安心できる環境や分かりやすい構造の整備も求められています。連携も必要不可欠です。協働学習で親も支援員も先生も一緒に助け合います。人は皆それぞれ。人との違いを理解し、温かな人とのつながりを作ることや学び合うことが最も大切な支援です。日本では、「一緒に良い」とされていて、みんな一緒にのランドセルを背負って同じ上履きを使う、そういう文化です。ちょっとでも違うとのけ者にされ、変な目で見られたり、責められたりすることがよくあります。とくに発達の偏りが大きい子どもとその家族は排斥に対して不安を抱え、孤立するケースも見られます。

私はそんな理不尽な同調圧力から子どもたちを守りたいと思っています。私は子どもたちが自分自身の心としっかり向き合い、自らの足で立ち上がるまで、見守り、待ちます。

「もし私がこの子どもだったら？」「もし私がこの子どもの親だったら？」思考を通し、彼らを理解したいです。AI時代のこれから、柔軟な対応、優しい気持ち、温かなつながりなどがさらに重要になってくると思います。これこそが人間の強みです。

Aくんは決まり事を守るのが苦手でした。職員に注意されると暴れて、走ったり、本棚の本を倒したりもしました。

最近では以前よりできることが増えています。周囲との関係の作り方もよくなり、一緒に登所する友達もできました。外遊びは相変わらず一人での虫探しが好きですが、部屋遊びではラキューのこま、トントンスもうを好きになりました。

ある日、お父さんが迎えに来た時、Aくんはなかなか帰りが

りませんでした。「片付けて」と声をかけられても、ラキューで作ったこまを壊したくないと言います。帰り際、彼は「使って」とこまを私の手に入れ、満足そうに帰りました。でも、先輩の職員はとても怒りました。私は甘く、ほかの職員との連携不足もあって、学童でのルールを破ったからでした。私は、責任を取り A くんにかまをバラバラにしてもらうことになりました。

翌日、A くん登所後、すぐに一緒に壁に貼ったルールを確認しました。A くんは「ルールは知ってる」と言いました。

「でも嫌だ。僕の自信作」

「そうか、自信作は残したいね、分かった」私は言いました。その後、打ち合わせの時、私は自分の思いを話した。「学童ルールは、状況や目的によって調整すべき。そもそも、『みんな』って何？『ちゃんと』って何？ A くんのような少数派の子の気持ちも配慮すべきです。ルールの補充をしてもいいんじゃないでしょうか。例えば、自信作を少し残したいときは相談できるとか」カリキュラムや成績評価のない生活の場である学童でこそ、支援の必要な子どもたちとの関係づくりを本音の部分で学べると私は思います。支援員の適切なサポートが必須ですが、柔軟に動こうという取り組みが広がれば共生社会の実現につながっていくでしょう。

私たち支援員は感情を汲むのも仕事です。多様性の尊重と受容、誰のことも当たり前のように支援できるような、相互理解の広がり に力を尽くします。これからも、「レインボーの子」と一緒に多彩な学童生活を送りたいと思います。

(八王子市由井かたくら学童保育所 支援員)

挑戦に失敗も共に

酒井 昂 杜

「悔しい、優勝したかった」

大学時代、母校の高校で障がいを持ったある生徒の介助員として週二回ほどのアルバイトをしていた。高校では年に一回、弁論大会という大会を開催していた。高校生活をテーマにエッセイを書き、スピーチをする大会だ。校内だけでなく、県大会もあるので比較的大きな全校イベントだった。彼も、弁論大会の優勝を目指して毎年エッセイを書いていた。高校三年目の冬、最後の弁論大会で優勝を逃した彼は泣きながらそんな事を言っていた。

介助員として彼と時間を共にしてきた私も、胸に熱いものがこみ上げるのを感じた。自らの体験や思いを誰の添削に頼る事もなく、一人で書き上げ、大会にぶつけた。結果は残念だったが、その過程も含めて、この大会に向けられた全てが彼らしさを形作っているように思え、その輝きが眩しく感じられた。もし彼が国語の先生から提案された添削を受け、審査員受けするノウハウを知る先生と一緒に内容を考えていたなら、これほど感情を揺さぶられる事はなかっただろう。

失敗する可能性を受け入れたとしても、自分の弁論を自分で完成させたいという自立心や、一切の添削を拒む頑固さ、一生懸命やった結果に悔し涙を流す純粋さ等は、彼らしさの象徴のように私には感じられた。この体験は、彼自身にとっても大きな出来事であっただろうし、振り返ってみると私にとっても、卒業後の支援において

大きな影響を与えた体験だった。その人らしい失敗は、自分にも周りの人にも大きな影響を及ぼすものだと言えると思う。

「個性は失敗によって培われる」と表現できると思う。私はよく緊張して人前で何かをする前は滝のように汗をかく。ひどい時は頭が真っ白になって、利用者さん達に助けてもらったり、素直に打ち明けてちょっと時間をもらったりする事もある。学生時代から緊張しやすく肩肘張りやすいこの性質のおかげで、いろんな人に迷惑をかけてきた記憶がある。職業人として利用者さんに迷惑をかける事はある種の失敗と表現される事もあるが、一人の人としてひたむきに向き合い、一生懸命にその人と一緒に考えていこうとする姿勢は、そうした多くの失敗とそれを勘弁し助けてくれた利用者さん達から培われてきたと思う。もし私が緊張を自己解決でき、不安をうまく処理できる人であれば、きっとまた別の私が形作られてきただろう。

私たちは日々失敗し、迷惑をかけ合い、お互いに勘弁し合いながら生きている。ちょっと迷惑な事も「あの人だからね」と飲み込んでいたり、何か失敗をしてしまっても許してもらったりする経験は誰にでもあると思う。しかし、障がいや貧困、生きづらさ等の特性を持つ人達は、悲しい事にこの失敗が許されない場面が多々ある。例えば精神障がいを持った方は病状の懸念があれば希望する初めての一人暮らしよりも、まずはグループホームへの入所を勧められ、その通りになってしまう事がある。また、やりたい仕事ややりがいのある業種への挑戦はしばしば失敗の予見と共に伝えられ、別の安定した働き口を探すよう指導される事もある。失敗は当事者にとって辛い思いをする出来事だけでなく、事業所にとってもリスクであると捉えられてしまい、失敗を未然に防ぐ事が事業所で働く支援者の重要な役割であるように言われる場合もある。

もちろん、失敗に向き合う事は恐ろしい作業でもある。失敗は、失敗する当事者だけでなく、その当事者を支えていた周囲の人にまで影響を及ぼす事がある。失敗の結果、深く傷ついて次の行動がしづらくなってしまう人もいれば、失敗を防げなかった事が批判されてしまう場合もある。時には死を決意してしまう人もいれば、周囲の信用を失ってしまう事だってありえる。同じ失敗を繰り返す事は、深く自尊心を傷つけるし、不全感にも繋がりがねない。

失敗にはメリットもデメリットもある、だからこそ、私は失敗を共にする支援が必要だと思う。誰もが失敗すれば傷つき、恥を感じて時には消えてしまいたくもなる。しかし、挑戦のないところに失敗はなく、失敗のないところに私が学生時代に感じていたあの輝かしいばかりの個性のきらめきを感じる事もないと思う。

失敗をしたとしても、また勘弁し合いながら次に進めるよう後押しする役割、そんな失敗支援こそが、「誰もが自分らしく」生きられる社会や文化を形成する上で欠かせない役割だと思う。その為に必要なのはその人らしい挑戦ができるように一緒に取り組む事だと思う。成功すれば互いに喜び、もし失敗してもまた挑戦ができれば良い。失敗した時は辛くて泣いたり怒ったりしたとしても、それ乗り越えた時、その人の個性はより豊かになり輝きを増すと思う。失敗を悔やんで泣き、過去の失敗を笑顔で語る時、人は暖かい表情をしている。

そうした失敗支援の必要性を利用者さん達と生きる中で日々感じている。今後もその役割を全うしていき、共に挑戦し、共に失敗していきたい。

(NPO 法人 OVA クライシスサポート部 インターネット・ゲートキーパー活動(相談員))

オ ン ジ の 帰 宅

下 野 え い 子

えーっ！

あのオンジが帰ってくる…予定外の出来事だった。

今から二か月前、この10年間の毎日と同じようにオンジ宅へ行くと、オンジは動けない状態で台所にいた。

骨折しているとすぐに分かった。ヘルパーの私は救急車を呼んだ。

オンジは「痛いんだからそっとしてよ！」といつも通りの憎まれ口を救急隊の若者に吐くも担架に乗せられ運ばれていったのである。

大腿骨の骨折でオンジは入院した。

正直、私はホッとした。

誰がなんと言おうと、医者に控えるよう言われても「酒をやめると言うなんて。あんたは医者をやめなさい」と毎日酒を飲む。

九十を過ぎ、独居のオンジに怖いものは何もない。ウイスキーの瓶は2日あれば空になるのだ。

そのうえに気難しく頑固。シラフのほうが難しいかもしれない。

ケアマネは何人も変わった。

「死んだときは死んだとき」と未来の話を頑なに拒む。

もちろん、ポックリ死ねば自分も周りも幸せではある。

しかし、人間そうはいかない。

痴呆症になったときにお金を下ろしに行ったり、自分の意思の代わりをしてくれる誰かが要る。

でも、いざというときという言葉はオンジの辞書にはない。

そうして歩くことも出来ないのに「帰る！」とオンジは言い出したらしい。

お盆の真っ最中、ケアマネは遠い地より帰宅することとなった。

病院が止めるにも関わらず「今日だ！今、退院するんだ！」言い張ったらしいので、骨折もオンジを変えられないなと私は思った。

そうして先日、退院後初、オンジ宅へと私は向かった。

一人で何もできず荒れてるんだろうな…。と恐々入室した私。

ところがオンジはちょこんとベッドに座っていた。

2か月見ていなかったので心もちオンジがひと回り小さく見えた。

私を見たオンジは言った。

「あんたには迷惑かけたね」それがオンジの第一声だったのである。

驚いた。憎まれ口しか聞いたことがなかったし、その類の台詞がオンジの口から出たことはこの十年間で初めてだった。

聞けば、立つことは出来ないが這って歩くことは出来るらしい。

ケアマネが家に残っていたお酒を高めの場所に置いていたが、もはや飲もうとは思っていないようだった。

ただ病院ではなく、家にいたいのだろう。周りから見れば病院にいたほうが安心ではある。夜も誰かがいて、ご飯も欠かさず食べさせてもらえる。

帰ってきた家ではヘルパーが1日一回来るだけで、不自由を感じても誰もいない。

しかし、どう考えたって一人暮らしは無理と周りが思ったところで、本人が自宅を選べばそれが現実となる。

国だって在宅で暮らすことを勧めているのだ。

ここで豊かな福祉社会を考える。

人に囲まれて過ごすことが豊かかといえそうではない。

一人でも自宅と決めたなら、どんなに不自由であろうと家にいるだけで豊かな生活なのだ。

そうして孤独に死んだとしてもそれはニュースになるような悲劇ではない。

私が訪ねるお宅で、四つん這いで歩く人は多くいる。立つことは出来なくとも四つん這いなら動けるからだ。

奇怪に見えるかもしれない。

しかし、本人は生きているだけである。

一人で何にも出来ないからこそ、自由だけは欲しい。

豊かな福祉社会を創るのは周りの前に本人だ。

えーっ！

そう思ったオンジの帰宅。

でも今は最期までそこにいられるよう頑張れと言ってあげたい。

(ニチイケアセンター松崎 訪問介護職)

一般の部

■最優秀賞

笑顔から生まれた心のシェア…………… 塚野 安枝

■優秀賞

笑う門には福来たる…………… 渡辺 勇三

病気(統合失調症)への理解を広げるために…………… 西 直人

■佳作

介護は生活の一部…………… 鈴木 愛子

音…………… 長井 文

■奨励賞

生き甲斐の生涯学習…………… 佐藤ゆき江

■ 最優秀賞

笑顔から生まれた心のシェア

塚野安枝

「えいごどん、いまさら、なろてん、なんになろか。」

私が初めて、英会話アクティビティのボランティア活動に訪れた時、聴こえてきた言葉である。私は、そこに立っていることが場違いのようで、思わず下を向いてしまった。

今から約18年前、自宅で子供向けの英会話学習教室を開いていた。教室では、子供たちとの関わりが多かったが、6人ほど60代の女性が通ってくださっていた。最初ローマ字さえ読めなかった生徒が、3年後には年一回行われる発表会で「ロミオとジュリエット」を英語劇で演じた。その時の女性のキラキラと輝いた表情が、私の考えていた老後に明るい未来の光を射した。

そして、この女性たちのような方が10年後、20年後も同じように、夢や希望を持って、老後を送ってくださったら、どんなに素晴らしいだろう。そう思って、市内にある特養老人ホームを訪問した。しかし、現実には、元気に過ごしていらっしゃる高齢者以外に、身体の不自由さで介護を必要としている方や認知症を患っていらっしゃる方など様々だった。現実を目の当たりにして、自分が思い描いていた老後の姿とのギャップが大きく、とまどってしまった。と同時に、高齢社会の現実をあまりに知らなすぎる自分の無知さに恥ずかしさを感じた。

高齢者の方と接し、関わりを持つ時間を経験することがまず「知る、理解する」ことのステップの一步につながる、そう信じて勇気

を出した。

「ここで、一週間に一回だけ、英会話のボランティアアクティビティをさせてください」。帰るときに、担当の職員の方をお願いしてみた。

こうして、私のボランティアの日が始まった。一週間に一回約 40 分。

翌週の午後 2 時、職員の方に促されて、30 ～ 40 名の高齢者の方々が、私を囲むように輪になって、ホールに集められた。にこやかに、と努めていた笑顔が段々ときこちなくなっているのが自分でもわかり、手に汗がにじんだ。私の顔を見て、食堂に逃げてしまう男性もいた。

ボランティアを始めて半年ほど過ぎた 10 月の中ごろ。この日のことが今でも忘れられない。「秋の果物や野菜」を取り入れた伝言ゲームを行った。まずは、りんごやなし、柿など実物を手に英語で紹介し、それを輪になって、伝言してもらおう。そして、秋に食べる野菜でおいしいものは？と皆さんに尋ねると、「かぼちゃ」と大きい声が返ってきた。それで「パンプキン」と伝言してもらうことに。ゆっくりと一周回って私のところに返ってきた言葉はなぜか「パンツキン」。私は笑いをこらえきれず、吹き出してしまい、近くにいた高齢者の方が私を見て大笑い。その笑いにつられ、たちまちホール全体が温かい雰囲気包まれた。今まで、私が抱いていた「私」と「高齢者の方々」という境界線が一瞬で消えていったような気がした。

それから、私は「教える」というより「楽しむ」という気持ちで、臨むようになった。すると、食堂に逃げていたおじいさんがいつの間にか、円の輪に入って、笑顔を見せてくれるようになった。おそらく、高齢者の方々の心が「鏡」となって、私の笑顔を映してくれたのではないか、と思っている。

この高齢者の方々の笑顔が私にどれだけ多くのエネルギーとパワーをくださったか。失恋や人生の岐路に立ち悩むことも多かった

2、30代。当時、自分に自信を無くし、前を向いて一歩も進めず、揺らぐ足元に絶えず不安を感じていた。そんな状況の中、背中を優しく押し、私の頭をゆっくりと上向きにさせてくれ、悩む心を温かく溶かしてくれたのは、この笑顔だったのだ。

私は、豊かな福祉社会を創るために、自分が体験して学んだことから言えることは、どんなに素晴らしく高度なサービスやボランティアであっても、一方的な感情や言動は人の心に届かない。しかし、人の心に寄り添って、互に通う気持ちがあれば、どんなに苦しく寂しい状況であっても、人は笑顔を忘れることはない。それは、決して、一方的な喜びだけではなく、相互的に喜びを生み出し、反射鏡のように心を映し出す。相手を知ること、喜びを分かち合い、哀しみや苦しみに寄り添うことで、少しでも心を共有することができるのではないか。

私にできること。それは、相手を知るため、理解するための手がかりのアンテナを張っておくこと。アンテナは短くても長くても、弱くても強くてもいいと思う。大事なことは「いつでも」「どこでも」「いつまでも」張っておくこと。そして、一歩を踏み出せるほんの少しの勇気を持つ。最後は、ちょっとだけ「楽しむ」心の余裕を持っているかどうか。

誰かの笑顔が見えると、取り巻く人々皆の心のエネルギーに変わると信じている。

私は、この7年間の活動を心の糧に、豊かな福祉社会の一員として、私らしく、前向きに楽しく人生を過ごしていきたいと思っている。

(小学校非常勤講師)

■ 優秀賞

ふれあいサロン

渡辺 勇三

この六月に黄泉の国へ旅立たれた国民的作家の田辺聖子さんへの思慕が募る。東大阪市の大阪樟蔭女子大学・田辺文学館で、お聖さんの作品をむさぼり読んだ。

ユーモア川柳をこよなく愛し、男性に優しさを求めるくせに、優しくされると引くいけずをさらりのお聖節は、十八番の恋愛小説にもちょこちょこ顔を出す。

大阪の川柳人をうならせ「番傘」を率いた水府はん（岸本水府）に親近感を抱き、庶民の暮らしと飾り気のない人間味を醸す川柳はやがて、大衆文学として華々しくデビューすると見通した達観がいま光を放つ。

国語の教科書に川柳を載せ、和みや笑いを育めば世知辛い世相も明るくなるというお聖さんに私は、共感をそそられた。

戦前、戦中は特高が睨みをきかせ五七五を隅に追いやる暗い歴史があった。お国のための呪文に縛られ操られ、とんでもない人生をさまよった人が少なくない。前線、銃後で不幸にも倒れた柳人に敬弔の意を添えたお聖さんの心根は著書にも見える。

戦時真ただ中の学徒出陣のあの忌まわしい世から一変の昨今は、まさに超高齢社会をひたすらまっしぐらである。

この二十数年のピーク後に高齢者の減少が見込まれるとはいえ、老人は増え続け、生産年齢人口は減り続けると当然、介護者は目立って不足する。社会保障給付費が二百兆円とかの目が飛び出るほどに

膨らむ計算といわれても、ぴんと来ない。

大概是鈍な私でも、じっとしておれず、何かお役に立てないかと手っ取り早く年寄りがお相手のボランティアを始めた。

家から車で近い介護老人保健施設に向かった。かつてホームヘルパー講習の実技指導を受けた馴染みがあった。

「何か私にお手伝いできることはありませんか。」施設長にずばり聞いた。

「入所者やショートステイ、デイサービスの利用者に話し相手を求める方が少しおられるが、若いスタッフには荷が重く腰が引けてましてね。」とのこと。

施設内の清掃か浴場の掃除でもと考えていて、「間に合うかどうかは分かりませんが、やってみます」と快く応じた。

施設長から紹介されたのは、八十六歳の元会社員。処女体験のことで出だしはぎこちなかったが、少しずつ打ち解けて会話が弾み、ときに出る大声や笑い声が施設で話題になったから驚きだ。

この方は新聞や雑誌をよく読まれ、選挙や安保法、日米同盟といった関心事にあんたはどう思うのと率直に聞かれ、話題が話題を呼ぶ展開にこちらは気が抜けない。

ある日、施設長に呼ばれた。傾聴の基本を大切に聞き役に徹して欲しいのお小言だろうと思ったが、さにあらず。

「物知りさんだけでなく、みなさんとのふれあいの場を創ってもらえませんか」。

施設長が思い切った提案を笑顔いっぱいに話されるから、面食らった。

入所者に案内のチラシが配られ、食堂も兼ねる大広間に車椅子の人を含めて二十人ほどが集まり、正直言って緊張した。

テレビや新聞のニュースに花が咲き、新聞記者時代の経験談も交えての談論風発が広がり、アットホームな雰囲気会場に流れ、サロン会の参加者は増えた。

週二回のボランティアが三カ月経ったところでまた、施設長に呼ばれた。今度は何を、と気をもんだがとんと見当がつかない。

「どうでしょう、みなさんがあなたに川柳の集いを仕切って欲しいと言うんです。俳句や短歌の同好者もいるが、川柳を望む声が強くて、世話役をお願いしますよ」。

物知りさんが大の川柳ファンで、施設長がアンケートを取られると川柳が一番に上がったようで、その事務局と会報誌の文芸担当をぜひと頼み込まれた。

七十代から八十、九十代の約四十人をメンバーに私も選者に加わり、毎週土曜日のサロンが待ち遠しくなった。

「薬より笑って治す気の病」、「年寄りが大志を抱く長寿国」、「一つ知り三つ忘れてゆくショック」、「年金を百までもらう腹づもり」、「消費税慣れたら次は長寿税」と次々に、ウイットに富む入選句を施設長や入所者も輪番の選者が選んでいる。

川柳サロンを続けると入所者らに笑いがこぼれ、食事の量も増えつつあると炊事班やスタッフから聞くと嬉しくなる。

人さまに特に話せることはないが、笑う門には福来たるや、笑顔は人間関係を無料でスムーズにできる優れもの、笑うてなはれや怒ったら損でっせ、人には思いやりを、自分に厳しく、ちょっぴりアホになっとくのがよろしいなどとにやかに話せば、耳を傾けてもらえるのはありがたい。

心が躍る日々を送る私は、果報者である。

(無 職)

■ 佳作

病気(統合失調症)への理解を広げるために

西 直人

私は市役所の市営住宅課で働いている。入居者であるY君から電話がかかってきた。彼は統合失調症を患っている。

「鳥の巣を何とかしてくれませんか？」

私は現場確認のため彼の住む団地へ赴いた。それは古巣であったので、二人で鳥の巣除去作戦を展開することになった。私が棒で巣を突いて落とす。それを彼が段ボールでキャッチする。この作戦のメリットは掃除の必要がないところである。私は見事に巣を一撃で落下させることに成功した。しかし、巣は見事に彼の頭上に着地してしまった。作戦失敗である。しかし、土と埃まみれのY君は笑って許してくれた。清掃し帰ろうとすると、

「隣の玄関ドアのボタン音と水道蛇口のキュッキュ音で気が狂いそう」

Y君が悩みを吐露した。相談に乗っているうちに世間話となり、彼が大学の後輩であることが分かった。二人の絆が生まれた瞬間である。その夜、私のスマホに彼からメール着信があった。

「隣人騒音 頭鉛幻聴自動思考 助けてください」

一日に何十件とくる。ドアのボタンは日常生活の範囲内であるが、彼にとっては家屋の解体工事をしているという。水道キュッキュも同様に、気になりだしたら制御できず恐怖を覚える。そのため日中は、団地の公園のベンチで昼寝をしている。彼の悩みは、どんな長いものさしでも測ることが出来ないくらい深い。そういえば、自

治会長から「公園に昼間から挙動不審な若者がいるので、子供達が遊べない」と、苦情があった。犯人は彼だったのか……。

私達は、人間が人間らしく生きる権利が保証されている。そして健全な環境のもとで、心身ともに健康に生きる権利が与えられている。彼はどうだろう。統合失調症であるがゆえに、騒音被害に悩まされる。そして逃げるように公園へ行くと変質者扱いされる。

テレビ番組で活躍していたお笑いコンビ『松本ハウス』は、加賀谷さんの病気（統合失調症）により活動休止していたが、病状が寛解したことにより復活し、近年はお笑い活動とともに病気に対する理解を呼びかける講演活動を行っている。私はY君に提案した。

「漫才で病気への理解を世間に広めようではないか！」

彼の回答はこうだった。

「それもいいけど、彼女がほしい。一緒にナンパして」

愛する人がいれば困難は乗り越えられる。私たちは駅前に鼻息荒く出陣した。しかしお互いナンパなどしたことがないため、緊張だけ大いに拡散しひどく疲れて帰ってきてしまった。原因はメンタルの弱さだと二人の意見は一致した。解決策は、度胸をつけるためにお笑いの舞台に立つ。私たちは、新春に開催される自治会主催のかくし芸大会への出場を決心した。

二〇一九年一月五日 集会所（大広間）

私・Y君「今日は僕達の初舞台です。よろしくお願いします！」《拍手》

私 「相方、こう見えても統合失調症なのですよ」

Y君 「精神保健福祉手帳二級を持っています。これは英検二級より難しい」《笑》

私 「統合失調症って、どんな病気ですか？」

Y 君 「幻覚、幻聴、被害妄想がおこります。エッヘン」《……》「今、盛大な拍手が聞えました！」

私 「早速、幻聴が聞えましたか」《笑》

Y 君 「あと、会話、行動、意欲の障害があります。かいわ、こうどう、いよくの頭文字をとって、かっこいい障害と申します」《笑》「昔は精神分裂病と言いました」

私 「誤解や偏見ですもんね。精神的な機能がまとまらないだけで、人格やこころに問題があるわけではないです」「およそ百人に一人が罹ると言われています。決して珍しい病気ではないですね」

Y 君 「はい。僕は二十八歳の時に発症しました。その時まで普通に生活していたのに、活力がなくなり仕事が続かなくなってしまいました」

私 「周囲からみたら、ただの怠け者ですよ」

Y 君 「働きたくても、働けないのがつらいです」

私 「統合失調症に雇っていた人には、芸術家のゴッホやノーベル賞受賞者のジョン・ナッシュがいますよね」

Y 君 「はい。英検二級なんて楽勝です！」

私 「受かってから言って下さい」《笑》

Y 君 「漫才する活力がなくなってきました」

私 「症状が出てきましたか。それでは終わりましょう」

Y 君 「待ってください。彼女募集中です！」

私 「元気じゃないですか」《笑》

Y 君 「すみません。皆様の娘さんを紹介して下さい」

私 「いい加減にして下さい」《拍手》

二〇一六年四月に施行された「障害者差別解消法」により合理的

配慮を可能な限り提供することが、行政、学校、企業などの事業者
に求められるようになった。これを契機に合理的配慮が個人にも広
がってほしい。障害を正しく理解し、相互に個性と人格を尊重し合
えれば豊かな福祉社会が実現する。彼の悩みも隣人の理解により解
決の方向を向いている。玄関ドアの隙間にクッション材を貼ってく
れたのだ。まだまだ未熟な漫才だが、私たちは病気への理解を広げ
るために邁進する。自分らしく生きられるために。そしてモテモテ
になるために。

(地方公務員 津市役所 市営住宅課)

介護は生活の一部

鈴木 愛子

夫は52歳の時、脳出血により重い運動麻痺と高次脳機能障がいである半側空間無視の障がいがあり、トイレなどでは見守りが必要であり慣れていない場所では動作に慣れるまでは注意が必要で、目が離せない事が多いと医師から説明され退院しました。

と、同時に私の介護生活も始まったのですが、有名人の綴られた介護体験の本を読んでは、参考にするつもりが反対にストレスになるのです。例えば、頼れる人を増やして甘えて気分転換とエピソードを紹介されていても気持ちの余裕のない私が目を通して、介護について私は甘えられる人も頼れる人もいない、うらやましい話だなあと感じてしまうのです。

他にも介護や障がいサービスを行政の方から紹介して頂いても、サービスを受ける側の夫の性格や年齢に合わない事もあり、本人が苦痛を訴え利用したがないものもあり、介護や障がいも人それぞれで。これが正解というものはなく、教科書通りにはいかないのだと実感しました。理想を求めるのではなく、夫にとって又、私にとって障がいを受容しつつも生活の中で楽しいと感じられることを探し築いていこうと思いました。

確かに介護は、苦勞も多いですし、障がいの残った夫の生活は、キレイ事ばかりではありません。でも、残りの人生が介護だけに重く追われていくのは嫌ですし、私達の生活から主役はあくまで私達で、その中で必要だと思う介護サービスを自ら選び、その上で専門

家の意見を伺おうと、夫婦で話し合いました。

「入浴は週1度位は、ゆっくり、じっくりとしたいからディサービスで利用したいけれど、入浴以外のディサービスは今は必要性を感じていない」とか「麻痺は残ってしまっているけど発病前のように趣味のカメラや読書は続けたいし、仕事も少しはやりたい」と具体的な要望を夫は伝えてきました。

一方私も、「毎日再発防止の為に減塩食作りは料理が得意ではない私にはしんどい」と本音を口にしたり、「夜間のトイレの見守りで肉体的負担を感じる」と不満も伝えました。

そして私達は、その事をケアマネジャーさんに伝え、可能ならば週一回の入浴のみのディサービスの利用を希望し、幸いにも見つけていただけ満足しています。またインターネットで減塩食を配達してくれるお弁当屋さんを見つけ、週二回定期的に利用し、私が苦しい減塩食作りをしなくてよい日を作り、その日は私も自分の好きな冷凍食品や総菜を買ってきて楽をする日を作りました。また夜間はベッドの側に便器を用意し、それを利用してもらう事で睡眠不足から解放されました。

夫の趣味の為、週一回近所の公園を通りながら図書館に向かうのですが、車椅子に乗りながら小型カメラを首からぶら下げ、季節折々の花や空を撮っては自己満足している様で、その間、私は私で公園を散策して好きに時間を流しています。図書館でもトイレ時は見守りするものの、彼は好きな本を楽しみ、私は机で家計簿の整理をしたり、自営の仕事の帳簿の整理をし夫の仕事のサポートをしたり、自分のペースで過ごしています。私がサポートするためか細々ながら夫は仕事を少しは続ける事ができ、本人の励みになっている様です。

私が夫に対する介護は、ズボラでがさつで大雑把。トイレで用が済ませられるのに夜間は私が楽をする為に道具を使ってもらう、時間がない訳でもないのに手抜きで宅配弁当を利用する日があるし、夫より後に布団に入ったためしはなく、夜9時になれば理由がなければ先に寝てしまう。献身的な介護とは、ほど遠いと思います。

それでも私も夫もこの介護生活が気に入っています。無理をしない、細く長くやれる範囲で介護され介護される、お互いの時間を大切にする「介護や障がいがあったからと言い訳しない人生にする」と二人で決めたから。

介護や障がいがあっても、自分達らしく生活するようになってから、私達は人と比べて焦ったり不満が無くなりました。もちろん不便さはありますが、心にゆとりが生まれました。

私の介護生活も6年目。もっともっと介護をしながらも楽しみをみつけていきたいです。

(自営業)

音

長 井 文

『カンカンカンカン』これは何の音かな？ あれれ、2つの大きな赤い電灯が左右交互に点滅しているし、上から棒が降りてきたよ。これは、電車が通過するので渡ると危険なんです。渡らないでください。と知らせる音なんです。バスを降りる時にブザーを押すのはなぜだい？ 次の停留所で降りるから停車して欲しい。と運転手さんに知らせる音だよ。駅やデパート等のトイレで音姫(おとひめ)のスイッチがあるよね。このスイッチは押せば水が流れる音だけにするんだけど何の為だろうね。人に聞かれたくない、恥ずかしい音を水が流れる音で分からなくするエチケットの音なんだよ。

音って危険を知らせたり、自分の意志を伝える意味や役割があるんだね。声も音の仲間さ。動物の声は身の危険を知らせたり、仲間を呼び集めたり恋を囁いたり等の意味があるんだ。でもね、音と音を組み合わせるより細かな内容を伝えられる音の集まりがあるんだよ。それが言葉なんだ。言葉を操るのは人間だけなんだ音の組み合わせ、例えば「あ」の音と「め」の音が組み合わさると「あめ」になるよね。「あめ」と聞こえた時、空から落ちてくる水滴を知っている人は「雨」とわかるし、口に入れる甘いお菓子を知っていれば「飴」と伝わる。音の組み合わせが言葉で意味を伝え人々の間で使われているのがわかったかな。

それと大切なのは言葉が通じるには互いに共通の認識がなければならぬんだよ。雨という事象や飴という品を知っていないと伝わ

らないんだ。人は生まれた瞬間から音を聞き続け、記憶し続け、見たり触ったりしながら音と物を繋げ雨と飴の違いを理解し区別するんだ。

それと人は人との会話を通じて言葉の使い方を習得し会話はより細かな情報交換を伝える声、そして音が伝わるんだ。こうして、音は意味のある言葉として人々に受け継がれ当たり前のように使われてきているけど、私たちと同じように手を使って会話を交わしている人がいる事は知っているかい？ その耳が音を捕らえていない、ろう者がいることは知っているかい？ 耳が音を捕らえられないならば危険を知らせる「カンカン」の音は聞こえないから、ろう者は踏切に進入するだろうね。危ないぞ！と後ろから呼び止めても聞こえないよ。もしも、ろう者が廻りの様子に気付けば助けられるね。音ではなく人々が手を動かして見せたり、腕を交差させて見せれば異変を感じるはずだよ。音に代わるのは、目で見て伝わる動きなんだ。音が聞き取れなければ人は目で見て伝える方法を考え、手を使って相手に伝える手話を考え出したんだ。例えば「雨」の手話は、両手を広げ指先を下に向けて小刻みに上下させる、これは雨が降る様から。「飴」は舌でほっぺの内側を押し頬のふくらみを手で撫でるんだ。

あるろう者が、『自分の耳は聞こえないけど、ただそれだけ。ただ聞こえないだけ』ってどういうことなのかわかるかい？ 耳があれば聞こえていると思っているよね。だから声をかけたのに知らんぷりされた。よもやその耳が音を捕らえていないとは考えてもいないから無視されたと誤解する。でもね、声をかけて知らんぷりだったら聞こえないのかもしれない。と思って両手で両耳を塞ぐしぐさをしてごらん。この手の動きは「ろう者？」って手話だから聞けばい

いんだよ。音を見える手の動きで表わせば、ろう者は答えられるよ。ろう者の言葉は音でなく手の動きやしぐさなんだ。生まれた時からろう者の耳に音は捕り入れられず、ろう者は見た物の型や動きを記憶しているんだ。『ただ聞こえないだけ』とは全ての音は記憶されない、音を知らないだけということなのかもしれないね。

音の集まりの声ではなく手を動かし、その動きに意味が加わって相手に伝える、手話がろう者の言葉なんだね。手話は音を発しない。ただ見るだけ、その手の動きやしぐさが語る言葉、動きに意味がある言葉なんだ。音では伝わらない、伝えられない、それこそが『ただ聞こえないだけ』なんだ。

すると、音に代わって伝える工夫ってなにがあるのかな。テレビは？ スイッチを入れたらすぐに音が聞こえるよ。映像は見えても音はないんだ。音に代わる方法は、画面に字幕がある。とか、話す人の隣で手話通訳者がいれば音の代わりになるね。全ての音を見える工夫で変えていくのは、人が人と暮らしていく中でとても大切で大事な事なんだ。一人ひとりが人々と繋がれる方法を一緒に考え試すことは日常生活の中で気づいた危険や不便を共有し、みんなが笑顔で暮らせる社会に変えていくことなんだよ。

(自営業)

生き甲斐の生涯学習

佐藤 ゆき江

亥年の今年、私は誕生日を迎えて84歳となった。こんなに長生きしても良いのか？という思いがあった。

ケアホームに入居して5年余り。三食昼寝付、お茶飲み会、散歩、読書三昧、リハビリ通所等など、時間はたっぷりある。ねばならぬ事も年々減ってきた。

バス、電車を乗り継ぎ徒歩を含めて小一時間で長女一家の住むマンションがある。そこに昨年生まれた曾孫を連れて孫娘がしばしば泊まりがけで来ている。曾孫の顔を見に行けるのだ。でもなかなか腰が上がらない。リウマチを患って十年余り、足も手も手術の跡だらけで人工関節やらボルトが埋め込まれていて長く歩くのがおぼつかないのだ。時間はたっぷりあるというのに。最近は読書も長く出来なくなった。目がじきに霞んできてしまう。TVも長時間は良くない。背中痛みも出てきた。それでつい横になる。そうすると自然に眠くなってしまふ。当然夜はあまり熟睡できなくなり、その分また昼間ぼんやりとして頭痛もするし、目眩も出てくる。何とかしなければ、これでは認知症への坂道を一直線に降りているということに他ならないではないか。

かつて私の理想は生涯現役でという事だった。昔取った杵柄というか20年も前に卒業して了った電気屋の女将の体験を生かして働けないものかとは思った。だが、先ずは体力的に無理、次に頭腦的に今のエレクトロニクスの世界に入り込む余地もなさそうである。

それでは他には？ もう一昔前、私は大好きな本に囲まれて一生過ごすことを夢見ていた。それで大学も国文科と決め卒業後は国立国会図書館の司書となり、時に文章を書き乍ら本に埋もれて暮らそうと決めていたのだが、現実とは全く異なる方向へと向かった。大学を一年で中退。電気店を営む夫と結婚し、商売に励みながら5児を産み育て、そして年をとり、現在に至っている。学生時代まであれ程熱中していた読書に封印し、商売の合間を縫ってPTAの役員も引き受け、子育て終了後は商店街の役員も引き受け、婦人部長も2期務めた。夫が脳梗塞で倒れたことで商売を辞め、失語症を発症した夫を15年看取り、そして見送った。その頃から私の体調が急激に衰え、入退院を繰り返すようになった。リウマチから来た手足の変調から手術も何度となく行われた。社会の役にも立っていない年寄りが、こんなに医療費を使ってもよいのかと後ろめたく思う日々でもあった。子どもたちに迷惑を掛けすぎた事から自らの意志でケアホームへ入居。穏やかな日々が戻ってきている。子どもたちは皆、親孝行で時々会うのをお互いに楽しんでいる。

長女は看護師で管理職をしたが、今年、フリーになり、時間を空けて通信教育を始めた。それでもレポート作成の時間に悩まされている由。その様な話を聞いた或る日、私も若い日に失った国文学への思いを娘にしみじみ話をしたのだが、それが思いがけない展開となったのである。

「そんなにやりたいのならこれからでもやってみたら？学費は私が出してあげるよ」と。

えっと思った。夢ではないか。経済的にも体力的にも無理ときめてかかっていたので現実の事として考えたことも無かったのだった。そうか、学費が何とかなるならば出来ないことではないのかも。

この60余年間、燻ってはちろちろ燃えていた国文学を学ぶ思いが
一気に燃え上がった。体力さえつけばやれない事ではないのか。な
らば身体を鍛えて通信教育に取り組もうか。スクーリングという事
もあるのだから、それにしても、親に学費を出して学ばせてくれる
子どもがいるなんて聞いた事も無い。感激で胸がいっぱいとなった。

今まであまり運動もせず、食欲も無いまま小食に過ごしてきた
日々を反省した。これからはしっかり食べて体力をつけよう。腰の
痛み、足の痛みもなおざりにせず、しっかり治療リハビリに励んで、
折角始めた勉強が途中で挫折してしまわぬ様、身体の状態をよくし
て開講に備えなければならない。娘の親孝行に報いるにはしっかり
学び、立派に単位を得て修了する事なのだ。

生涯現役は頓挫したが、生涯学習の夢は現実のものとなりつつあ
る。何と揚々たる世界がひらけてきたことか。今まで、趣味として
短歌を詠み、エッセイを書き綴ってきた。が書けば書くほど、自分
のもの知らずを思い知らされて情けない思いをしてきた。これから
国文学の奥深い世界を学んでゆく事により私の書き物も自然内容が
より向上してゆくかは未だ解らないが、私ひとりの勉強だけに終わ
らせない何かが出来るかもしれない。そうだ、その様な大きな夢を
持っても良いのだろう。書く事がいよいよ愉しくなってきた。

長生きしてこんなに良い思い出ができるなんて、人生ほんと捨て
たものではありませんね。

(無 職)

あ と が き

2019 年度第 21 回「豊かな福祉社会を創るために」エッセイの受賞作品集をお届けします。

今回は副題を『わたしらしく、あなたらしく』としました。「豊かな福祉社会」と「らしさ」という 2 つのキーワードが 236 の応募作品それぞれの中で作者の思いの形を作り上げています。

わが国では子どもたちの育つプロセスの中で「自分らしさ」や「個性」などの価値がそれなりに比重を持って語られています。しかし現実の学校生活では同じ年代で仲間だけで通用する言葉を使い、同じような価値観を持つ圧力が高い中で、ごく僅かな違いを探して、なじまないクラスメイトを排除する環境で過ごす事になってしまっています（ちょっと言い過ぎですかね）。そう言う所で育ってきた若者たちがどれだけ自分らしさを持つことが出来るのか大変おぼつかない気持ちになります。そう言う意識で応募作品を読んで行くと、いやむしろ自分らしさを持っている、あるいはもっと持とうとしているエッセイが多い事に驚きました。自らが自閉症であるという特性を深く理解し、「自分とは？」という問いにしっかり答えているエッセイ、車イスの自分を社会が特異に感じていると言う視点からのエッセイ、子どもの目線で見た終末期の母親の生き方から自分らしさを見つけたエッセイなど、読みごたえのある真実の言葉が綴られています。

世界のどこかで起きている紛争や感染症のまん延なども、今やあっという間に国境を越えてその影響が広がります。そして我々の暮らす日常のコミュニティにも、私たちとは違う価値観や行動規範を持つ他者が当たり前そこにいる事になっています。そう言う他者と出会う時、こちら側に確立された「自分」がなければ彼らの存在に敬意を払う事も出来ないし、関心を持ってコミュニケーションをはかる事も出来ないでしょう、それが平和な共生社会の第一歩であるにもかかわらず。

『わたしらしく、あなたらしく』生きて行く事の出来るコミュニティはお互いの違いを自然に受け入れることが出来るし、そうであれば容易に他者を受け入れることも出来ます。そうなることで彼我の両方が幸せとなり、社会は「豊かな福祉社会」の方向に動き始める事でしょう。そういう出発点が「らしさ」である事が心に刻まれる今回の作品群でした。

次回の募集にも奮ってご応募を求めます。応募者の皆さん、有り難うございました。

東京 YMCA 医療福祉専門学校
校長 八尾 勝

第21回 愛恵エッセイ募集

豊かな福祉社会を 創るために

わたしらしく、あなたらしく

応募方法

1. 応募締切 **2019年11月15日(金)必着**
2. 対 象 1) 学生の部 在学中の方ならどなたでも。
2) 専門職の部 福祉関係の仕事に従事している方々。
3) 一般の部 福祉に関する経験や分野は問いません。
3. 字 数 1,600～2,000字
4. 体 裁 1) 手書きの場合…400字詰めA4横書き原稿用紙を使用し、読みやすい字で書くようにして下さい。
2) PC使用の場合…A4横書きで1ページを30字×26行に設定して下さい。
5. 表 紙 1) 裏面のフォームをコピーし、必要事項を記入の上、作品の表紙に添付して下さい。
(PC使用の場合、同様の内容を記載したもので可)
6. 提出方法 1) 郵 送…下記宛先へ郵送して下さい。
2) メール…下記メールアドレスにご送付下さい。
その際メールのタイトルに「エッセイ応募」と必ず明記して下さい。
上記表紙の内容も一緒にご送付下さい。
7. その他 一人1作品の応募に限りです。

賞

最優秀賞 各部1点……賞状と副賞(5万円)

優秀賞 各部3点……賞状と副賞(2万円)

佳作 若干名……賞状と副賞(1万円)

*受賞者の作品は「2019年度エッセイ集」に掲載されます。

(事務局にて表記上の修正をすることがあります。)

*後日、都内にて表彰式を行います。

応募された方に別途ご案内致します。

お預かりした個人情報本目的以外には使用しません。

主催:公益財団法人 愛恵福祉支援財団

共催:公益財団法人 東京YMCA

問合せ・応募送付先

東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」

〒169-0051 新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

TEL:03-6278-9071 FAX:03-6278-9072

E-Mail:kaiin@tokyoymca.org

豊かな福祉社会を
創るためにあなたの
考えや思いを聞かせて
ください



“豊かな福祉社会を創るために”
— 2019 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 —

2020 年 2 月 29 日 第 1 刷 発行

主 催	公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共 催	公益財団法人 東京 YMCA
発 行 者	公益財団法人 愛恵福祉支援財団 〒 114-0015 東京都北区中里 2 - 6 - 1 TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712
印 刷	アーク印刷株式会社 〒 114-0024 東京都北区西ヶ原 3 - 66 - 9 TEL 03-3915-4240 FAX 03-3915-4212

非 売 品

